

第2章

江東区の生物多様性

- 1 江東区の地理的特徴と生態系
- 2 江東区における生態系サービスの利用
- 3 江東区における生物多様性の現状と課題



第2章の色 —わすれなぐさ 勿忘草

勿忘草の花の色に由来する、春の空気を感じさせる優しい色です。

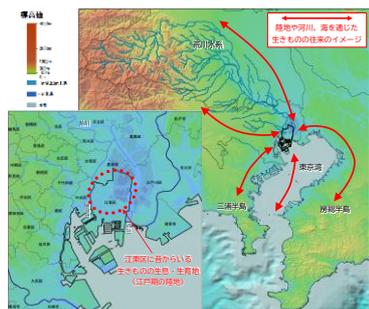
◆表紙の生きもの —ヌマチチブー

第2章の概要

1 江東区の地理的特徴と生態系 p.25~

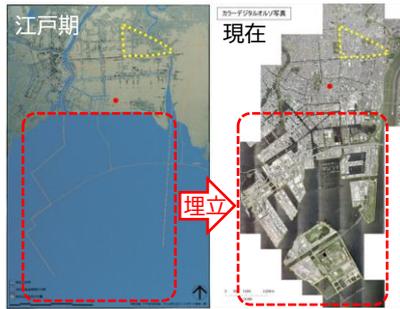
◆ 地形と位置

江東区は東京湾に面するとともに荒川、隅田川に囲まれた低地であり陸地や河川、海を通じて生きものが往来します。



◆ 土地利用の変遷

江戸期は湿地や干潟が広がり農業や漁業、木材業が盛んでしたが、明治期以降は埋立により工業化・宅地化が進みました。



◆ 生きものの概況

区内には多様な水辺や緑地が広がり、2,500種以上の生きものが確認されています。一方、人間活動の影響等で外来種も確認されています。



2 江東区における生態系サービスの利用 p.34~

◆ 供給サービス

江戸期では、江戸前の「食」である深川めしや江戸東京野菜等の恵みを受けてきました。

現代では、食材等のほとんどを区外に依存しています。



◆ 文化的サービス

現代では、花文化や区民農園（農体験）、釣り等があり、江戸期には潮干狩りも盛んに行われていました。区内には、フジやハギ等花の名所が数多くあります。



◆ 調整サービス

ヒートアイランドの緩和や大気汚染・騒音の低減、水質浄化、水害の低減、延焼防止等、様々な自然の働きによって区民の暮らしが守られています。

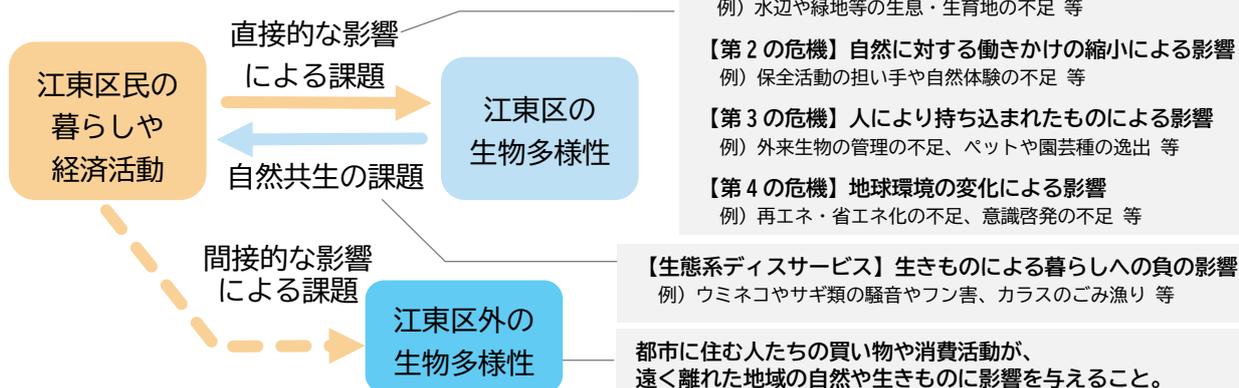


◆ 基盤サービス

区内にあるポケットエコスペースや公園、河川・運河、干潟等の緑地や水辺は、生きものの生息・生育地を提供し、江東区の生態系を形作り、各生態系サービスを支える土台となっています。

3 江東区における生物多様性の現状と課題 p.40~

江東区では、昔から多くの自然の恵みを受けてきましたが、今では様々な原因によって区の生物多様性が危機にさらされると同時に、生きものによる負の影響もあります。これらの生物多様性の現状と課題を様々な視点から整理しました。



第2章 江東区の生物多様性

本章では、江東区の現状に合った戦略の策定に向けて、江東区の現状と課題を整理していきます。

1 江東区の地理的特徴と生態系

(1) 江東区の地形と位置

江東区は、南側が東京湾に面し、東側に荒川、西側に隅田川が流れる低い土地に位置しています。南側には、埋立地が広く広がっているのも特徴です。

荒川と隅田川といった大きな河川は、様々な生きものが棲む場所として重要な役割を果たしています。江東区はこれらの河川の下流から河口にかけての地域にあるため、河川の増水時には上流から生きものだけでなく、生態系に必要な栄養塩類(窒素・リン等)や有機物が流れてくる他、魚類が上流へ向かう際に通る場所にもなっています。

また、江東区は江戸川区、墨田区、中央区、港区、品川区、大田区と隣接しており、東京湾にも広く面しています。東京湾には神奈川県の大磯半島や千葉県の大房半島も含まれているため、周辺の地域から陸地や河川、海を通じて生きものが行き来することで、多様な生きものの生息・生育地となっています(図 2-1)。

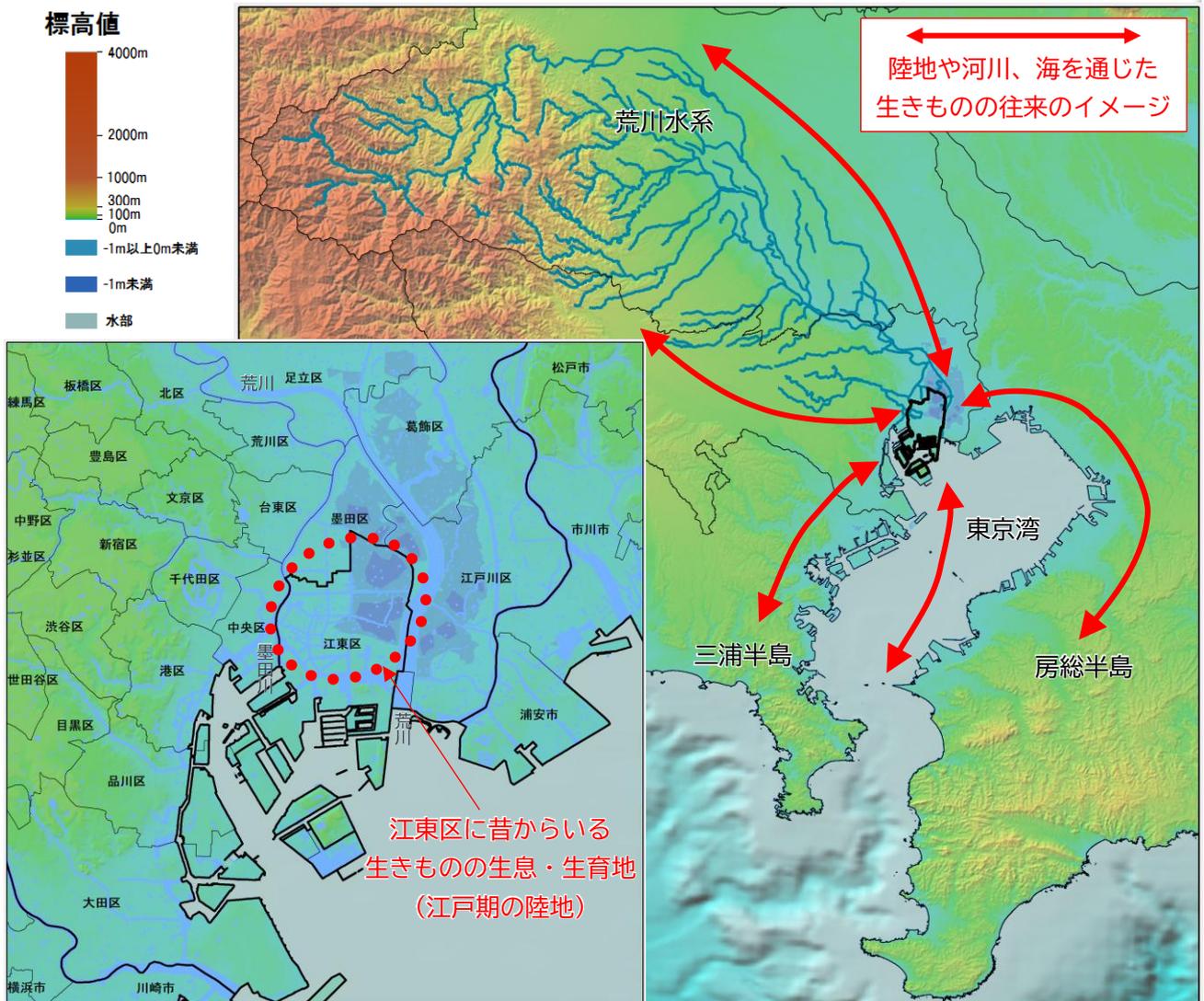


図 2-1 江東区の地形と位置

【出典】 国土地理院「色別標高図」・「基盤地図情報 GIS データ」、国土交通省「国土数値情報 GIS データ」より江東区作成

(2) 江東区の変遷

1) 土地利用

江東区では、江戸期から現在にかけて、土地の使われ方が大きく変わってきました。

① 江戸後期→明治初期



【江戸後期→明治初期】文化元年→明治9年
(1804年→1876年)



江戸期の開発が始まる前は、江東区のほとんどが干潟や湿地でしたが、既に陸地化していた亀戸付近に人が住む集落がありました。江戸前期には、現在の森下辺りで土地の開発が始まり、深川村が誕生しました。

深川地区では、寛永6(1629)年に「深川猟師町」が誕生し、漁業が盛んに行われました。深川浦(現在の永代、佐賀あたりの南側で大横川の一部)では、内湾沿岸漁業と干潟での採貝・採藻業が組み合わせられ、鰻、手長海老、牡蠣等の貝類、スッポン等が名産として知られるほどに生きものが豊富に生息していました。これらの旬で新鮮な魚介類は、深川めしをはじめとする「江戸前」の食文化を形成しました。

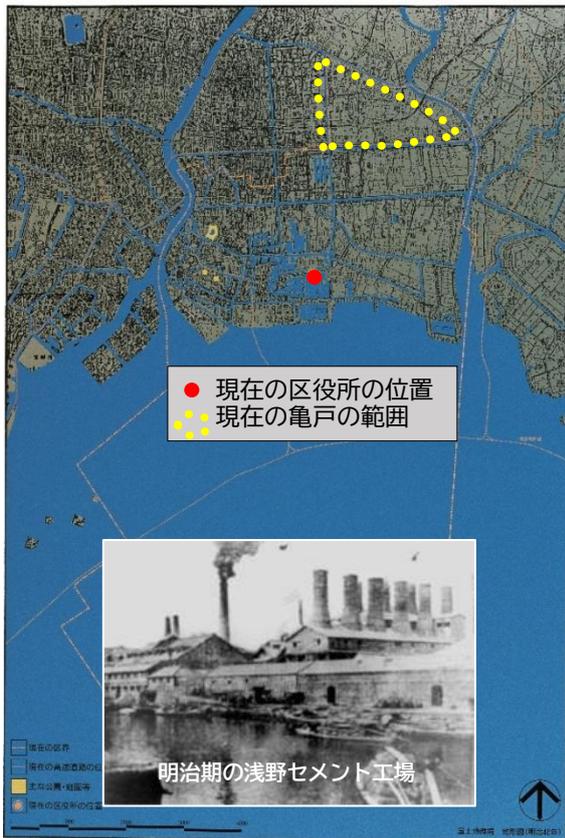
明暦3(1657)年の「明暦の大火」をきっかけに、焼け跡の土や江戸のまちのごみが深川永代浦周辺(現在の富岡八幡宮付近)に運ばれ、埋め立てが進みました。

その後、深川地区は河川を利用した舟運の拠点となり木材や米、油等の物流及び商業のまちとなりました。また、富岡八幡宮の門前町としても賑わい、人々が訪れる場所として発展しました。一方、城東地区では、江戸の近郊に位置する農地として、国内発祥として知られる「野菜の促成栽培(加温や保温を行い、通常の収穫時期より早く作物を育てて出荷する栽培方法)」が進められた他、畑では今でいう「江戸東京野菜」等の農産物が盛んにつくられていました。このように、かつては生態系の恵みをふんだんに利用していたことが伺えます。

【出典】江戸後期→明治初期の地図：江東区「まちの記憶と未来展」(令和7(2025)7月)

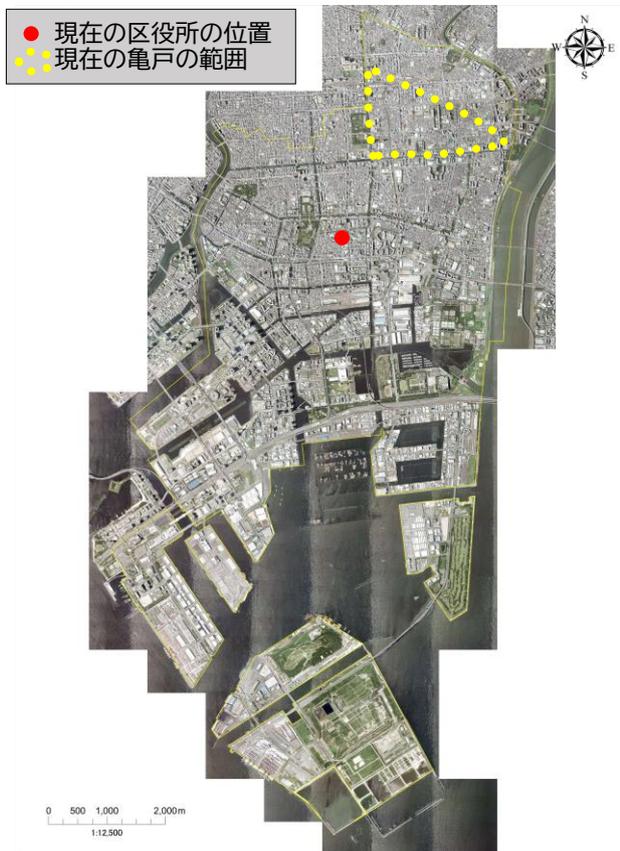
錦絵(広重『江都名所』) 洲崎しほ干狩』：国立国会図書館ウェブサイト「国立国会図書館デジタルコレクション」
(<https://dl.ndl.go.jp/pid/1308383>)

② 明治中期→大正中期



【明治中期→大正中期】明治10年→大正11年
(1877年→1922年)

③ 現在



【現在】令和4(2022)年

【出典】明治中期→大正中期の地図：江東区「まちの記憶と未来展」(令和7(2025)7月)
現在の地図：江東区「江東区みどりの実態調査報告書」(令和5(2023)年3月)

明治期の中ごろから、近代化の進展により、江東区の土地の使われ方は大きく変わりました。周辺では、水路を使った船の交通が発達し、工業地域として発展しました。

しかし、地下水のくみ上げや天然ガスの採取が進んだことで、明治の終わり頃(明治43(1910)年前後)から地面が沈み始め、昭和の初めから昭和45(1970)年代にかけては、地盤沈下が深刻な問題となりました。

更に、工場からの汚れた水や家庭からの排水が河川や水路に流れ込んだことで水質が悪化し、生きものの生息・生育環境に影響を及ぼしました。

地下水や天然ガスのくみ上げに対する規制や、公害を防ぐための様々な対策が進められた結果、昭和48(1973)年以降、地盤沈下は次第におさまってきました。

これまでの歴史的背景や都市開発によって、かつて広がっていた農地や自然の干潟・湿地は失われてきましたが、昭和53(1978)年からは、江東区が河川を再び活かすために「親水公園事業」として自然を取り戻すための取組が始まりました。例えば、地震に強い護岸が整備された河川では、木を植栽する等、水辺の景観を良くする取組が行われています。

現在では、江東区の面積の約6割が住宅地や公共施設、工場、道路・鉄道等、都市部として人が生活する空間になっているとともに、多くの水辺・緑地の整備等により、新たな生態系が創出されています。

2) 水害とまちづくり

荒川の下流域に広がる江東区では、水辺に囲まれた地域の安全を守るため、様々な対策を進めてきました（表 2-1、図 2-2）。しかし、その結果、洪水による強い水の流れや土砂の移動といった自然の攪乱^{かくらん}が抑えられ、自然が持つ大切な働き（河川の上流から土砂や栄養分を運ぶこと、生きもの^{かぐら}の多様な生息・生育環境を創出すること等）が失われることがあります。

このように、治水対策には生物多様性を保全するうえで良い面、悪い面の両方があることを理解し、治水対策と生物多様性の保全の両立について考える必要があります。

表 2-1 水害とまちづくりの整備内容

整備メニュー	整備内容
外郭堤防と水門の整備	荒川、隅田川、東京湾に囲まれた江東三角地帯を高潮から守る堤防・水門の整備
区内部の河川の整備	地盤沈下対策のかさ上げ工事により脆弱化した護岸を地震水害から守る河川整備
下水道の整備	豪雨に対応するための浸水対策としての下水道（合流式）を整備
災害に強い都市基盤整備	雨水幹線やポンプ所、調整池、公共施設・民間建物の雨水貯留・浸透施設の設置
耐震・耐水対策事業	堤防・水門等の補強、揺れや液状化対策の鉄筋補強・地盤改良、電気設備の耐水化



図 2-2 江東区の外郭堤防と水門の整備

【出典】江東区「まちの記憶と未来展」(令和7(2025)7月)

コラム 水彩都市の充実

水彩都市・江東区には水辺に親しむことができる整備が多く見られます。

開放感がある、一体的に整備された河川と道路・公園

憩い空間と安全な遊歩道や自転車も通行可能な散策路の機能を備えた空間を創出することで、周辺環境と連携した地域の活性化や、まち全体の更なる魅力の向上を図っています。

また、荒川や旧中川の高水敷は、水辺に親しめる公園として整備されています。

歩行者・自転車・公園利用者が共存し、安全で快適な親水公園



▲詳しくはこちら

治水・利水の使命を終えた河川は、江東区の貴重なオープンスペースとして親水公園が整備されています。

また、仙台堀川公園等は自然のままの川の水を導水しているため、魚類などの水生生物が多く見られます。

水辺と緑地に親しめる水辺・潮風の散歩道

河川の耐震護岸や運河の内部護岸上を、水と緑のネットワークづくりの一環として、水辺に親しめる、みどり豊かな散歩道として整備しています。



【出典】江東区「まちの記憶と未来展」(令和7(2025)7月)

コラム 松尾芭蕉と深川

松尾芭蕉は、延宝8(1680)年、俳句の活動に専念するために日本橋から深川に移り住み、約14年間、深川の草庵(芭蕉が住んでいた小屋)を拠点に活動しました。

深川への移住をきっかけに、「蕉風」と呼ばれるような芭蕉独自の俳句の世界をつくり「古池や蛙飛びこむ水の音」等多くの名句や『おくのほそ道』等の紀行文を残しました。

深川の草庵は、はじめ「泊船堂」といいましたが、弟子の送ったバショウの株がよく茂り、人々は「芭蕉庵」と呼ぶようになりました。深川で詠んだ芭蕉の句には、様々な生きものが登場することから、当時の江東区にあった自然や風景等の生物多様性は、芭蕉の俳句活動に大きな影響をもたらしたと言えます。

◇芭蕉が深川で詠んだ、生きものが登場する句◇

「古池や蛙飛びこむ水の音」「蓑虫の音を聞に來よ草の庵」
「深川の末、五本松といふ所に舟をさして、川上とこの川下や月の友」等

詳しくはこちら▶



「芭蕉庵」『江戸名所図会』
天保7年(1836)

頭巾をかぶった句を練る芭蕉。庭にはバショウの株・タケ・飛石・古池等が描かれる。

【出典】公益財団法人 特別区協議会ウェブサイト「江東区ゆかりの人 松尾芭蕉」
(https://www.tokyo-23city.or.jp/jigyo/kikaku/tenji/r_03/030803.html)
公益財団法人 江東区文化コミュニティ財団 江東区芭蕉記念館 所蔵画像

(3) 江東区内の生物相の概況

1) 江戸期以降の生きもの

江戸期の江東区やその周辺（現在の中央区、台東区、荒川区、江戸川区、葛飾区等）では、人々は海岸を埋め立てて住む場所を広げながら、様々な自然環境や生きものを生活に活かしてきました。

当時の動植物について記された文献には、ヒツジグサやデンジソウのように今でも変わらずに見られる生きものが記録されています（図 2-3、表 2-2）。江東区では当時から生きものを愛でる園芸文化が栄えていたことも大きな特徴の一つであり、これらは江戸期に持ち込まれたものの可能性もあります。

一方、中には現在の江東区では見られなくなった貴重な生きものがいたことも記録されています（表 2-2）。これらは、当時の干潟や湿地、水田、水辺、草地等の自然環境が豊かだったことを示していると考えられます。

江戸期以降、江東区では、戦争やその後の経済発展により、大きく環境を変えてきたことにより、多くの生きものが生息・生育するには困難な環境となった時期がありました。しかし、富岡八幡宮や清澄庭園等の環境の変化が少なかった場所に生き残った生きものに加え、近年の河川や公園、ポケットエコスペース、企業緑地の整備により、荒川や隅田川、周辺区等から再び多くの生きものが入り込み、江東区の生きものの生息・生育が維持されてきたものと考えられます。

また、江戸期に確認された種のうち、現代でも確認されている種は、ポケットエコスペースや企業緑地、新砂干潟等、規模の大きさに関わらず、水辺と陸地のエコトーンがある自然度の高い場所で見られています。これらの環境を創出・再生することで、江戸期に見られていた生きものや現在の東京都レッドデータブックで絶滅危惧種とされている種も生息・生育できる可能性があると考えられます。

一方で、コウノトリやトキ、マガンに代表される水田等を中心とした広大な湿地環境に生息する種は現在の江東区では見られていません。

江戸期の生きもの図譜①

カワセミ（「百鳥図 3」石顛道人（増山雪斎）（1800年頃））



江戸期の生きもの図譜②

カレイの一種（「梅園魚品図正 巻1」毛利梅園（1835年））



図 2-3 現代でも見られる江戸期に生息・生育していた生きもの

【出典】国立国会図書館ウェブサイト「国立国会図書館デジタルコレクション」

（カワセミ：<https://dl.ndl.go.jp/pid/1287228/1/3>、カレイの一種：<https://dl.ndl.go.jp/pid/1287112/1/8>）

表 2-2 江東区周辺^{※1}で江戸期に確認されている主な生きもの

項目	江戸期に記録が確認された種	
	近年（過去10年程度）の調査（現地調査（【現】と表記）・文献調査（【文】と表記）で確認された種 ^{※2}	近年の調査で確認されなかった種 ^{※2}
植物	<ul style="list-style-type: none"> ・ヒメミズワラビ（都立海の森公園/R2年【文】） ・デンジソウ（横十間川親水公園ポケットエコスペース/R5年【文】） ・ヒツジグサ（横十間川親水公園・潮見さざなみ公園ポケットエコスペース/R5年、再生の杜/H27年【文】） ・マツモ（再生の杜/H27年【文】） ・ヒルムシロ（木場千年の森【文】） 等	<ul style="list-style-type: none"> ・サンショウモ ・ムジナモ ・ワレモコウ ・シオクグ 等
哺乳類	生息地が江東区周辺と断定できる記録なし	<ul style="list-style-type: none"> ・ノウサギ ・ニホンイタチ ・キツネ 等
鳥類	<ul style="list-style-type: none"> ・オオヨシキリ（亀戸天神社/R6【現】） ・コヨシキリ（新砂干潟/H25【文】） ・カワセミ（仙台堀川公園等/R6【現】） ・シギ類、チドリ類（新砂干潟等/R6【現】） 等	<ul style="list-style-type: none"> ・コウノトリ ・トキ ・マガン 等
爬虫類	<ul style="list-style-type: none"> ・ニホンスッポン（横十間川親水公園、亀戸天神社等/R6【現】）、ニホンイシガメ^{※3} ・ニホンマムシ^{※2} 等	—
両生類	生息地が江東区周辺と断定できる記録なし	
陸上昆虫類	<ul style="list-style-type: none"> ・スズムシ（都立海の森公園/H30年【文】） ・ヒガシキリギリス（都立海の森公園/H30年【文】） ・ヒグラシ（富岡八幡宮/H30年【文】） 等	<ul style="list-style-type: none"> ・クツワムシ ・ゲンジボタル 等
魚類	<ul style="list-style-type: none"> ・マコガレイ（都立若洲海浜公園海釣り施設等【文】） ・マゴチ（荒川河口付近/R2年、汐浜運河護岸/R5年【文】） ・ドジョウ類（木場千年の森、釜屋堀公園・東陽一丁目第一公園ポケットエコスペース/R5年【文】） ・ニホンウナギ^{※3} 等	<ul style="list-style-type: none"> ・アオギス ・シラウオ ・ナマズ 等
底生動物	・ヤマトシジミ（区立旧中川水辺公園、新砂干潟等 R6【現】）	・ハマグリ

※1：参考文献で荒川区、江戸川区、葛飾区、江東区、墨田区、台東区、中央区、千代田区に記録があるもの

※2：調査の詳細は資料編の「4 現地調査及び文献調査の方法と結果」に詳述

※3：有識者ヒアリングにて、近年確認があるもの

【出典】野村圭佑「江戸の自然誌『武江産物志』を読む」（平成14（2002）年11月、どうぶつ社出版）

東京府南葛飾郡 編纂「南葛飾郡誌」（昭和63（1998）年10月、千秋社出版）

清田秀雄・沖田堇（NPO法人ネイチャーリーダー江東）「南葛飾郡誌：草野俊介（1923）：自然的環境-植物 植物目録（地域の過去文献に関するAPG分類による植物目録の作成；1）」（令和7（2025）年3月、ネイチャーリーダー江東）

清田秀雄・沖田堇（NPO法人ネイチャーリーダー江東）「北東低地帯文化財総合調査報告 第1分冊（地域の過去文献に関するAPG分類による植物目録の作成；2）」（令和7（2025）年3月、ネイチャーリーダー江東）

清田秀雄・沖田堇（NPO法人ネイチャーリーダー江東）「渡邊瞭（1981）：江東区南部の植物：植物目録（地域の過去文献に関するAPG分類による植物目録の作成；3）」（令和7（2025）年3月、ネイチャーリーダー江東）

2) 現代の生きもの

現代の江東区には、様々な水辺や緑地が広がっており、それぞれの環境に応じて、2,500種以上の多様な生きものが棲んでいます。また、100種近くの重要種（表 2-3）も確認されています。江戸期に見られたような生きものをできる限り回復するとともに、現在棲んでいる生きものがこれ以上減少しないように保全していく必要があります。

▶ビオトープ（ポケットエコスペース）や親水公園にある草地や湿地の生きもの

- ・水鳥（サギ類、カモ類、等）、小型鳥類
- ・湿地性植物（カワヂシャ、ミゾコウジュ等）
- ・昆虫類（バッタ類、トンボ類、チョウ類等）等



仙台堀川公園
ポケットエコスペース



シオカラトンボ
(仙台堀川公園ポケットエコスペース)

▶荒川・隅田川や中小河川、運河、池、親水公園等の河川の生きもの

- ・水鳥（アオサギ、カルガモ、ユリカモメ、カワセミ、ウミネコ等）
- ・両生類（ヒガシニホンアマガエル等）
- ・魚類（ハゼ類等）等



荒川



マハゼ（横十間川親水公園）

▶都立公園や緑道公園にあるまとまった樹林地や草地の生きもの

- ・猛禽類（ツミ、ノスリ等）
- ・小型鳥類（コゲラ等）
- ・爬虫類（ニホンカナヘビ、アオダイショウ等）
- ・樹林性昆虫類（ゴマダラチョウ等）等



都立亀戸中央公園



ツミ
(都立辰巳の森緑道公園)

▶荒川に造成された人工的な干潟「新砂干潟」や釣り場でもある人工磯の生きもの

- ・塩生植物（ウラギク、イセウキヤガラ等）
- ・水鳥（シギ・チドリ類）
- ・魚類（ハゼ類等）
- ・底生動物（カニ類、ゴカイ類、ヤドカリ類等）等



新砂干潟



キョウジョシギ
(豊洲ぐるり公園)

▶富岡八幡宮や亀戸天神社等歴史的な神社仏閣の生きもの

- ・ラン科植物（クゲヌマラン、キンラン等）
- ・爬虫類（ニホンスッポン、ニホンヤモリ等）等



富岡八幡宮



クゲヌマラン（富岡八幡宮）

一方で、人の活動によって持ち込まれたり、河川の上流から流れてくることで、江東区には多くの外来種が入り込み、定着しています。植物では、東京湾の夢の島で初めて確認された「ユメノシマガヤツリ」等、外国から来て定着した植物（帰化植物）が広く分布していることから、江東区は「帰化植物の宝庫」とも呼ばれています。

特に、生態系や人の暮らしに悪い影響を与えるおそれがある「特定外来生物」については、荒川沿いの「ナガエツルノゲイトウ」、区内全域で見られる「アライグマ」、青海ふ頭の「ヒアリ」、ポケットエコスペースの「アメリカザリガニ」、河川の「ブルーギル」等、現地調査では10種、文献調査を含めると17種が確認されているため、これらの特定外来生物から元々の生態系を保全する取組も必要です（表 2-3）。

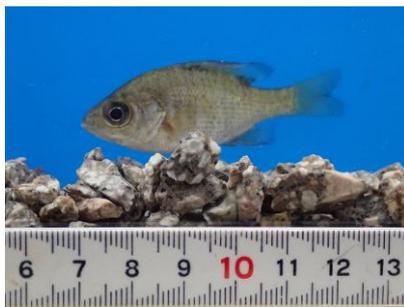
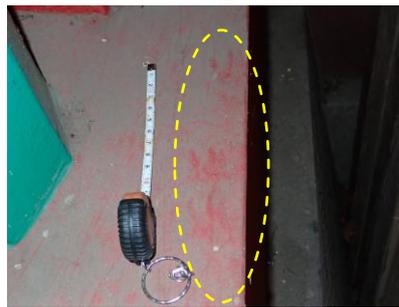
ブルーギル
（横十間川親水公園）アライグマの足跡
（富岡八幡宮）ナガエツルノゲイトウ
（旧中川水辺公園）

表 2-3 令和 6-7 年の動植物現地調査で確認された種数

分類群	確認種数			重要種	特定外来	備考
植物	52 目	136 科	696 種	26 種	3 種	17 地点の四季調査結果を示す。ただし、分類群によって地点や時期は異なる。
哺乳類	3 目	4 科	5 種	0 種	1 種	
鳥類	12 目	29 科	63 種	34 種	0 種	
爬虫類	2 目	6 科	6 種	4 種	1 種	
両生類	1 目	3 科	5 種	4 種	1 種	
昆虫類・クモ類	12 目	112 科	375 種	6 種	1 種	
魚類	6 目	12 科	26 種	5 種	2 種	
底生動物	16 目	44 科	68 種	13 種	1 種	
合計	104 目	346 科	1,244 種	92 種	10 種	

※重要種：環境省レッドリスト 2020、東京都レッドデータブック 2023 に掲載された希少種等の種数

特定外来：特定外来生物の種数